

あれから10年 あのとき私は

阪神・淡路大震災のとき（26年前）

平成7年1月17日（火曜日）午前6時過ぎ、私は寝室の布団の中にいた。そこに妻が来て、「淡路島で大きな地震が起きたようよ。電話をかけてみたら」と揺り起こされた。淡路島の旧北淡町には従姉妹が住んでいた。あとで分かった野島断層の震源地である。眠気の中で受話器を掴みダイヤルを回すと、すぐに彼女が出た。「ものすごい地震で、あちこちで家が倒壊している。家族は無事だから」と安否確認してホッとしたが、午前7時のニュースで大惨事と知り、もう電話は通じなくなっていた。それから4日後、支援のため何とか現地に入ったが、まだ強い余震が続き、彼女の家（写真）も無残に倒壊していた。小学校の避難所にいた彼女に聞くと、貴重品を取りに家に戻ると、そこで私からの電話が鳴ったそうで、あれから26年。彼女もまだ元気であり、淡路島は見事に復旧・復興したが、一瞬で多くの命が奪った阪神・淡路大震災は、私たちに多くの教訓をもたらし、内閣府は“減災”という言葉をつくった。



東日本大震災のとき（10年前）

平成23年3月11日（金曜日）午後2時46分、私は蕪崎市内のNPO法人の事務所で、午後4時からの会議資料を確認していた。その時、グラリグラリと目眩のような揺れが起きた。慌てて屋外に出たが、すぐに収まったので部屋に戻り、テレビをつけて宮城県沖の激震であることを知った。震度7は阪神・淡路大震災と同じであったが、マグニチュードは約50倍あり、「だから山梨まで揺れたのか・・・」と納得した。既に大津波が起きていたとは知らず、時間通りに市役所にでかけた。ところが、市長室でヘリが中継する大津波の映像から、仕事どころではなくなった。内陸に押し寄せる泥色の大波が、田畑やビニールハウスを次ぎつぎと飲み込み、避難で渋滞している車を襲った。私が10歳の時、釜無川の堤防が決壊して集落を飲み込んだあの光景と同じであった。そして15日から、蕪崎市と市内諸団体が協働して「一升支援」と称する募金と白米の提供を市民に呼びかけた。市内の精米所に待ち行列ができ、店舗から白米がなくなるほど市民が心を寄せてくれた（写真左）。24日に東北自動車道が開通すると、支援物資を積んだ第一便に乗せてもらい宮城県東松島市に向かった。計画停電中のため高速道路周辺は真っ暗で、行き交う車は赤い回転灯の車両ばかりであった。福島を過ぎると雪が降ってきた。仙台の泉パークングの高速道路上で一夜を明かし、ソニーの緊急誘導車両に従い東松島市内に入った。川沿いを走ると徐々に被災の様子が現われ、案内された野蒜地区（写真右）で、自衛隊が重機で遺体捜索している惨状にカメラを向けたが震えが止まらなかった。6月、国の復興構想会議が“防災から減災への転換”を答申し、あれから10年。失われた2万人の命から、“命てんでんこ”や、普段からの備えや訓練の大切さを学び、それを伝えている。



特定非営利活動法人減災ネットやまなし
理事長 向山建生